

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
信者父聖神共に始

なきことばわがすくいのため
言吾救爲に

どうていぢょよりうまれしものをほめうとて
童貞女生者讃歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
拜彼甘其身

じゅうじかにのぼりしをしのびその
十字架上死忍其

こうえいのふくかつにてしせしものを
光榮復活死者

ふくかつせしめたまえばな
復活活給たり。

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等同座者忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實神智ハリストの役者聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい
神撰笛愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
満器我國光

しよ うしゃ 、 あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ
照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 なん ぢ の ぼ く ぐ ん の た め 、 お よ び
爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
三 者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
光 榮 父 子 聖 神 歸

す 、

せ い せ い しゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に なん ぢ を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 なん ぢ は は じ め わ が く に に お い て お の
爾 初 我 國 於 己

れ を が い ら い しゃ と し り た れ ど も 、 ハ ス ト の
外 來 者 知 れ ど も 、 ハ ス ト の

ひ か り と あ た た か き を な が し 、 なん ぢ の て
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことな爲し、かれらにか
 屬 神 子 爲 し、 彼 等 神
 みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 の た め に い の り
 たまえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 え、 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 よ 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第5調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン。
 わがきゅうせいしゅ、ひとをあいするしゅ
 我 救 世 主 人 愛 主
 よ、なんぢはぢごくにくだり、ぜん
 爾 地 獄 降 り 、 ぜん
 のうしゃとしてそのもんをやぶり、ぞう
 能 者 と し て そ の も ん を や ぶ り 、 ゑ う
 せいしゅとし て、ししゃをおのれとともに
 成 主 と し て 、 し し ゃ を お の れ と と も に



司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有

となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾

り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に

痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が

聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる

もの者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の

仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈

と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖

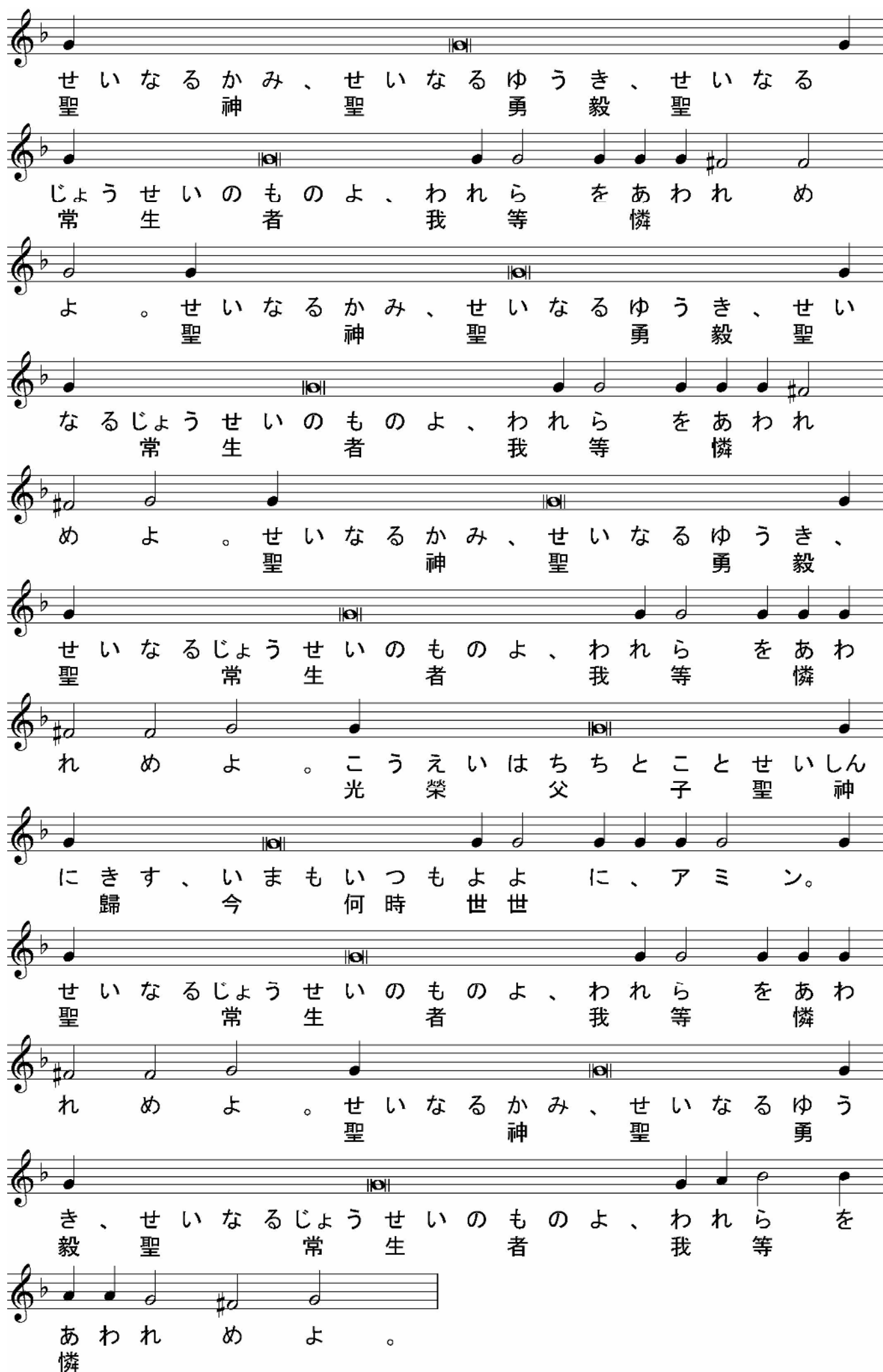
なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世

に、



【 聖三祝文 】



せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じ ェ ー ス の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐
 よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 な る じ ェ ー ス の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐
 め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅
 せ い な る じ ェ ー ス の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ェ ー ス の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 毅 、 せ い な る じ ェ ー ス の も の よ 、 わ れ ら を
 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第5調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、



誦經) 主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、



誦經) 主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、



【 アポストロス 使徒經 176 端 コリント後書4章6～15節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん たつ} コリント人に^{こうしょ よみ} 達する後書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて^き 聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、我等を^{われら なんぢら} 爾等と^{とも} 偕にハリストスに^{けんご} 堅固にし、^{およ} 及び我等に^{われら あぶら} 膏つけし^{もの かみ} 者は神なり、

^{かれ} 彼は我等に^{われら いん} 印し、^{かつしん} 且神の聘質を我等の^{へいし} 心に^{われら} 與えたり。^{こころ あた} 我神を^{われかみ} 籲びて我が^よ 靈の^{わ たましい} 證

^{しゃ な} 者と爲す、我^{われいま} 今に至るまで^{いた} コリントに至らざりしは、^{なんぢら ゆうじよ} 爾等を宥恕するが^{ゆえ} 故なり。此れ我

^{ら なんぢら しん しゅ} 等は爾等の信に^{あら} 主たるに^{すなわちなんぢら} 非ず、乃^{よろこび} 爾等の喜を^{たす} 助く、蓋^{けだしなんぢら} 爾等は信を^{しん} 以て^{もつ} 立つ

^{われまたうれい} なり。我復^{もつ} 憂を以て^{なんぢら} 爾等に^{いた} 至らざらんと^{みづか} 自ら^{さだ} 決めたり。蓋^{けだしも} 若し我^{われなんぢら} 爾等を^{うれ} 憂いし

^わ めば、我が^{うれ} 憂いしむる者の^{もの} 外、^{ほか} 誰か我を^{たれ} 喜ばしめん。^{われ} 我が書して^{よろこ} 爾等に^わ 達せしは^{しよ} 即^{なんぢら} ^{たつ} ^{すなわち}

^{これ} 是なり、我^{われきた} 來る時、我を^{とき} 喜ばしむべき者に^{われ} 由りて、^{よろこ} 憂を受けざらん爲なり、蓋^{もの} 我は^よ

^{なんぢしゅう} 爾衆に^{おい} 於て、我が^わ 喜は^{よろこび} 爾衆の^{なんぢしゅう} 喜なりと^{よろこび} 信ず。我^{しん} 大なる^{われおい} 哀と^{かなしみ} 心の^{こころ} 痛^{いたみ}

^よ とに縁りて、^{おお} 多くの^{なみだ} 涙を以て^{もつ} 爾等に^{なんぢら} 書せり、^{しよ} 爾等を^{なんぢら} 憂いしめん爲に^{うれ} 非ず、乃^{ため} 我が^{あら}

^{なんぢら} 爾等に^お 於ける^{あい} 愛の^{ふか} 深きを^し 知らしめん爲なり。^{ため}

(比較用 口語訳) あなたがたと共にわたしたちを、キリストのうちに堅くささえ、油をそそいで下さったのは、神である。神はまた、わたしたちに証印をおし、その保証として、わたしたちの心に御靈を賜わったのである。わたしは自分の魂をかけ、神を証人に呼び求めて言うが、わたしがコリントに行かないでいるのは、あなたがたに対して寛大でありたいためである。わたしたちは、あなたがたの信仰を支配する者ではなく、あなたがたの喜びのために共に働いている者にすぎない。あなたがたは、信仰に堅く立っているからである。そこでわたしは、あなたがたの所に再び悲しみをもって行くことはすまいと、決心したのである。もしあなたがたを悲しませるとすれば、わたしが悲しませているその人以外に、だれがわたしを喜ばせてくれるのか。このような事を書いたのは、わたしが行く時、わたしを喜ばせてくれるはずの人々から、悲しい思いをさせられたくないためである。わたし自身の喜びはあなたがた全体の喜びであることを、あなたがたすべてについて確信しているからである。わたしは大きな患難と心の憂いの中から、多くの涙をもってあなたがたに書きおくった。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、あなたがたに対してあふれるばかりにいただいているわたしの愛を、知ってもらうためであった。

【 アリルイヤ 主日第5調 】

司祭) ^{なんぢ} 爾に^{へいあん} 平安、

誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ つた
主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世に 爾の眞實を傳えん、



誦經) けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた
蓋我言、慈慈は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、



司祭) (黙誦: ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し
人を愛する主 宰よ、我が心に神を知る智慧の 淨き光を輝かし、我が思

ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ
念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に 爾の福たる 誠

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ
を畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ 爾の 喜ぶ

ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、 蓋 ハリストス神

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし
よ、 爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と 爾の無原の父と至聖至

ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
善にして生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、 今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書 89 端 22 章 1～14 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安、



司祭) マトフェイ^{でん}傳の聖福音經^{よみ}の讀、



司祭) ^{つつし き しゅ さ たとえ もう い てんこく そのこ ため こんえん もう} 謹みて聴くべし、主は左の譬^くを設けて曰えり、天國は其子の爲に婚筵^くを設けたる君

^{おう ごと かれそのしよぼく つかわ め もの こんえん まね} 王の如し。彼其諸僕を遣して、召されし者を婚筵に招きたれども、^{かれらきた ほつ} 彼等來るを欲せ

^{またた ぼく つかわ い め もの つ い み われすで ふるまい そな} ざりき。又他の僕を遣して曰えり、召されし者に告げて云え、視よ、我已に餐^{そな}を具え、

^{わ うし こ けもの すで ほふ いつさいそな こんえん きた しか かれら かえり} 我が牛と肥えたる畜と已に宰りて、一切備われり、婚筵に來れ。然れども彼等は顧

^{あるもの そのた あるもの そのあきない ゆ よ もの かれ しよぼく とら はづか} みずして、或者は其田に、或者は其貿易に往けり、余の者は彼の諸僕を執え、辱し

^{これ ころ おうこれ き いか そのぐん つかわ か ひとつろし ほろぼ かれら} めて、之を殺せり。王之を聞きて怒り、其軍を遣して、彼の兇人を滅し、彼等の

^{まち や とき かれそのしよぼく い こんえんそな め もの た ゆえ なんぢ} 邑を燬けり。時に彼其諸僕に謂う、婚筵備わりたれども、召されし者は堪えず、故に爾

^{らちまた ゆ あ もの ことごと こんえん まね そのぼくみち い およ あ もの あ} 等通衢に往きて、遇わん者を悉く婚筵に招け。其僕途に出でて、凡そ遇いたる者、惡

^{よ と これ あつ こんえん せきざ ものみ おう せきざ もの} しきと善きとを問わず、之を集めれば、婚筵に席坐する者満ちたり。王は席坐する者を

^{み ため い かしこ ひとり こんれい ふく き もの み これ い とも なんぢなん} 觀ん爲に入りて、彼處に一人の婚禮の服を衣ざる者あるを見て、之に謂う、友よ、爾何

^{こんれい ふく き ここ い かれもくねん そのときおう えきしゃ い かれ てあし} ぞ婚禮の服を衣ずして此に入りたる、彼默然たり。其時王は役者に謂えり、彼の手足

^{しば かれ と そと くらやみ とう かしこ なき はがみ けだしめ もの} を縛りて、彼を取りて、外の幽暗に投ぜよ、彼處に哀哭と切齒とあらん。蓋召されたる者

^{おお えら もの すくな} は多けれども、選ばれたる者は少し。

(比較用 口語訳) イエスはまた、譬で彼らに語って言われた、「天国は、ひとりの王がその王子のために、婚宴を催すようなものである。王はその僕たちをつかわして、この婚宴に招かれていた人たちを呼ばせたが、その人たちはこようとはしなかった。そこでまた、ほかの僕たちをつかわして言った、

* * * * *

※聖体礼儀③ へ